

「命の向こうにある永遠なるもの」を残した 遠藤周作さんを偲ぶ



遠藤周作さんが亡くなられて一年が過ぎた1997年9月29日、東京、丸の内の東京会館で「遠藤周作さんを偲ぶ会」が催された。遠藤さんが毎夜子守歌の如くに聞いていたという、声楽家のお母さまが吹き込まれた聖歌の流れる中、出席者たちが遺影に白いカーネーションを献花、続いて聖書が朗読され黙とうが捧げられた。安岡章太郎さん、佐藤愛子さんなどの作家仲間、宗教家、遠藤さんが主宰しておられた劇団「樹座」の劇団員など、遠藤さんを愛する人々が多方面から集まり、その数は1000人を越えた。その方々のお話からは、遠藤周作さんの人間味あふれる人柄がにじみ出ている。

安岡章太郎さんは、終戦の年に三田で遠藤周作さんと一緒だった。慶應大学が、半分以上壊され満足に窓もなく、真冬は埃だらけの吹き抜けだった時代である。「きわめてザラザラした思い出が多い」と安岡さんは語る。遠藤さんは非常に元気で、いつも大声でしゃべっていた。「僕らはあのあるところを思って三田の山に集まってきていたのか」と安岡さんは言う。

昭和28年安岡さんは『悪い仲間』で芥川賞を受賞した。先輩の所へ挨拶に行くと、「今日はフランスから帰国したばかりの遠藤の出版記念会があるから一緒に行こう」と言われた。安岡さんは「遠藤」と言われても誰も頭に浮かばず、一人「遠藤周作」という三田で勉強した不良青年がいるが、あれはフランス留学などできるような柄ではないし、本を出版するような柄でもないし、と思いがら部屋に入った。すると主賓の席に白麻のもの凄く糊のきいた背広を着た遠藤周作さんが座っていた。「オー、遠藤。そこはお前が座る席ではなくて、主賓の席だよ」と言うと、遠藤さんは「安岡、芥川賞をもらったやつで君と同名がいるぞ」と言った。ユーモアにあふれ、いたずら好きでにぎやかだった遠藤さんの人柄が偲ばれるエピソードである。遠藤さんが芥川賞を受賞したのはその2年後の昭和30年、『白い人』によってだった。

安岡さんは現在77歳、朝5時ごろ目が覚めると近くに流れる多摩川まで散歩をする。遠藤さんが亡くなった今、「遠藤と一緒にここを散歩したかった。東京のように汚辱にまみれた街でも朝ほんの一瞬静まり返る、そんな街と一緒に散歩したいと思った」と、長年のつき合いだった遠藤さんとの別離の寂しさを表現した。

「俺は90歳まで生きる、君は80歳までだ」と言うのが口癖だったと語るのは「初恋の人」佐藤愛子さん。70歳の古稀には2人で食事をするようになっていた。ワリカンでと付け加えるのを忘れなかった。もともと、佐藤さんが遠藤さんの初恋の人であるという話は、遠藤さんが同級生だった楠本憲吉さんと2人で口裏を合わせて作り上げたフィクションだった。「初恋の人」と言われ続けて、反対するのも飽き飽きしているうちに初恋の人の気持ちになってきてしまった、と語って会場を笑わせる。女学校時代の友人に「遠藤周作なんて女学校の通学のとき一緒にじゃなかったわよね」と聞くと、「電車の後ろの方で汚らしいのがいつも座ってたけど」という答え。それを遠藤さんに言うと、「俺はソバブンと呼ばれていた」そばにくるとブンと臭う。

佐藤さんが何か愚痴を言うと、「君はそんなアホなことを考えていたのか」と大笑いされ、その笑いにつられて笑っているうちに傷口が癒されるような慰め方だった。「悲しいというより、どうしてくれるんだ！ というような寂しさが日増しに大きくなる」と語って佐藤さんは遠藤さんとの思い出を締めくくった。

遺族代表の挨拶は、遠藤さんの長男でテレビ局勤務の龍之介さん（41歳）だった。遠藤さんは亡くなる3年前の1993年に『深い河』を書き上げ、これが最後の書き下ろし小説となった。「これまでの作品のモチーフがすべて集まっているような感じで、最後の作品になるのではないか」と思うとショックだったという。『深い河』で「命の向こうにある永遠なるもの」をテーマにした遠藤さんが危篤に陥ったのは、奇しくもその出版の日だった。その後小康を得たが闘病生活は昨年亡くなるときまで続く。95年に入院してから病状は急激に悪化した。「自分の知っているユーモアのある大きな父ではなく、おびえきった目で弱々しく、命のろうそくが消えるような感じの父を見るのが忍びなく、病院に通う足も遠のいた」と言う。そんなとき、龍之介さんはある禅宗のお坊さんの言葉に触れる機会があった。それは「裏を見せ、表を見せて、紅葉散る」というものだった。39年間父に守られながら「表」のみを見てきたことを感じ、残りの数カ月父の「裏」を見ていることが自分の努めだと思った。最後の1カ月は俗っぽさが消え、「これが小説を通



して父が求めてきた「あの人」（キリスト）の顔なのか」と、我々のうかがいしれない病院での遠藤さんの様子を語ってくれた。「最後の1年は近い人に最期の作品を見せてくれたような気がします」

未亡人の順子さんのお話では、『沈黙』の碑が建っている長崎県外海町の夕陽ヶ丘という岬に、近く遠藤周作記念文学館が建設されることになったという。外海町は昔キリシタンが多く隠れ住んだ町で、殉教した人が簀に包まれてこの海に流されたという。「そんなことが本当にあったのかと思うほど海がきれいな町だが、また悲しみがいっぱいあった町でもある」と語る。遠藤さんはよく「踏み絵を踏む足も痛い」という言葉を書いた。「踏み絵を踏んで後悔と不安の中で一生を終えた人もキリシタン弾圧の犠牲者だ」と順子さんは言う。遠藤さんが亡くなったのは午後6時36分だった。長崎は陽が長くその時間もまだ明るかった。順子さんは「いつかこの外海町でサンセットミサをしたい」と願っている。遠藤さんの亡くなった日をメモリアル・デーとして、「350年間に殉教した、または転んだ人を含めたキリシタンのために鎮魂のミサを行いたい」と熱い思いを語った。

遠藤さんはカトリック教徒だった母親のもとで幼児洗礼を受けた。子供のときに着せられたこのキリスト者という洋服が自分の背丈に合わないと感じながら、自分の体に合う和服に着替えようともがき苦しんだ。それでも「私はもう、ぬごうとは思うまいと決心をした。私はこの洋服を自分に合わせる和服にしようと思ったのである。それは、人間は沢山のことで生きることとはできず、一つのことを生涯、生きるべきだと知ったからである」（『合わない洋服』より）と言い、カトリック体験は生涯その文学の基調をなすものだった。しかしカトリック作家としてのその口調は、「若くて幸福なときはいいのです。だがあなたたちが年をとっていつか人生の悦びと一緒に悲哀や苦しみをどうしても味わねばならなくなったとき、もう一度、だまされたと思って聖書を開いてごらんなさい」（『聖書のなかの女性たち』より）とあたたかい。ときに悪戯やユーモアで苦しみを笑い飛ばすように人間を描き続けた遠藤文学が、私たちに残したものの大きさを改めて実感する。

春号でご紹介しましたセナール・スーダンの会が、このたび広く一般の方々の理解と協力を求めるために、趣意書を作成して新しい活動を開始しました。

この会を創設した武岡洋治・名古屋大学農学部教授は、5年前スーダンへ調査旅行に出かける際、予防薬としてマラリア治療薬を処方され、その副作用でほとんど視力を失ってしまいました。武岡氏の体験は、「強度の副作用をもつことから、1980年代後半にWHOによって追放されたファンシダールが、何故いまだに日本で処方されているのか」と現地で武岡氏の治療にかかわった医師たちを驚かせ、サリドマイド、血液製剤などと同類の薬害問題として注目されました。

「（生死をさまよった闘病中に）当地の人々から受けた『ひたむきな熱意と奉仕』は、『愛に根ざした連帯と協力』と呼ぶにふさわしいものであります。これこそが人間に生きる勇氣と希望を与えとの理解を、私たちは共にすることができました。その精神を生かして、スーダンの人々と共に歩む働きをしたいというのがこの会の趣旨であります。」（セナール・スーダンの会趣意書「趣旨と目的」より。）

セナール・スーダンの会は、生活、衛生環境という、日本とは異なった要因に端を発するにせよ、同じ視覚障害を負うスーダンの子供たちと問題を分かち合うことを目的として設立されたものです。会では、(1) 失明児童への学費補助 (2) 盲学生への奨学金補助 (3) 盲教育指導者の養成協力 (4) 教材補充 (5) その他盲教育の向上に役立つこと、などをその活動計画に挙げています。実際に、国際視覚障害者援護協会が行う盲人留學生の受け入れに協力、この1月にはスーダンから留學生が1名日本で勉強するためにやってきます。同援護協会は、世界各国から盲學生を受け入れ鍼灸などの技術を指導、彼らが母国にもどってその技術を伝えるという形で援助を行うNGOの一つです。



会の趣意書など詳しい資料は下記までご請求下さい。

セナール・スーダンの会：

代表者 武岡洋治

事務局長 青山章行

〒468-0042名古屋市長白区海老山町1709 青山章行方

Tel (052)809-1166 Fax (052)809-1167

郵便振替口座00810-0-12978, 口座名義 セナール・スーダンの会

スーダン事務局：

c/o Dr. Issam A. W. Mohamed

P.O. Box 12910-11111

Khartoum, SUDAN

Tel & Fax 249-11-273322

社会福祉法人 国際視覚障害者援護協会：

理事長 金治憲(キム・チーフン)

〒174-0052東京都板橋区蓮沼町20-18

Tel (03)5392-4002 Fax (03)5392-4128